



病院経営とパリアン7

医療法人パリアン理事長
川越 厚

賛育会病院長に就任(その1)



若き病院長に託されたこと。それは、経営破綻寸前の病院をたてなおすこと

石原前院長が後継者として私を指名し、先生が退職なさった1992年10月、私は賛育会病院の病院長に就任した。時に47歳、気持ちも充実していた。

その時点で結腸がんの手術を受けてからすでに10年弱が経過しており、体力的な問題はなかった。またライフケアシステムの佐藤先生のもとで地域医療、特に在宅医療のことを深く学んでいたため、病院長になるための助走期間は十分だった。

地域の大病院の病院長としては若かったと思うが、すでに「家で死にたい」を保健同人社から上梓しており、NHKや民放でも私の活動が紹介されていたので、それなりのネームバリューもにあった。組織の動かし方も、ある程度、知識として持っていた。

病院長を引き受けるに当たり、私には一つの大きな夢があった。それは賛育会病院にホスピス(緩和ケア病棟)を作り、在宅と連携した理想のホスピスケアを提供するモデルを作ることだった。しかし、現実には甘くなかった。

私に託されたことは、破綻寸前にあった賛育会病院の経営立て直し。緩和ケア病棟を作るといっても院内のコンセンサスはなかったし、第一立ち上げのための資金も全くなかった。

賛育会病院長就任依頼

私が賛育会病院長に就任した時、社会福祉法人賛育会の常務理事(法人事務局の責任者)は、佐藤惟吉さんが勤めていた。しかし翌年4月には植清輔さんが常務理事に就任したので、実質的には植清輔さんとの二人三脚で病院改革を行うことになった。

法人としての、私への病院長就任依頼は植さんからあったが、そのとき病院が置かれている状況、私に託されていることなどについて、詳しい説明があった。植さんは長年、都市YMCAで働いてきた切れ者で、私よりも年上。豊富な社会経験を持っており、特に組織運営のイロハを厳しく教えていただいた。

ライフケアシステムのメディカルディレクターをしていた私の所へ、理事会の正式依頼を持って植さんが現れたのは、たしか賛育会病院就職直前の初夏の蒸し暑い日の午後だった。市ヶ谷駅の近くの喫茶店で、半袖にネクタイ姿の植さんが私に次のような話をした。

「先生、実はいま病院は大変な経営的な危機に見舞われています。ホスピス開設も先生にやっていただくことは理事会の方針でもあります。その前に病院の立て直しをしなければなりません。申し訳ありませんが、先生の給料は十分出すことができません。」

植さんが汗をぬぐいながら、深刻な表情で私にこう告げた。

以前、石原前院長に新宿の喫茶店のルノアールでお会いした時、このような深刻な話を聞くことはなかった。ただ、賛育会病院が経営危機的状況にあることは、私もそれなりに理解していた。しかし、それが自分の給与に反映するとはまったく考えていなかった。ただ、植さんが提示した額はそれまでもらっていた給与と比較して大変良かったので、特段問題にすることはなかった。



「厳しい状況だからこそ、逆に闘争心を奮い起こされるような気がした」と言えば聞こえはよいが、楽天的な能天気男といえども、問題は深刻だな、と思わずにはいられなかった。しかし、はっきりした根拠を持っていたわけではないが、立て直しをする自信だけは十分持っていた。

柳田邦男先生の戸惑い

「川越さん、もったいないことをしましたね。日本の在宅ホスピスケアがこれからという時に、先生はどうして病院長なんか引き受けたのですか？」

国は在宅へ向けて大きく舵を切り、その普及に向けて様々な法整備、制度改革に取り組んでいた。
< 2ページに続く >

< 1 ページから >

しかし、現場のリーダーがいない。ましてや、がん患者を対象とした在宅ケアは全くの未知の分野。そのことを先生は嘆かれたのだと思う。

ライフケアシステムの医師として働いていた時、柳田先生は私と一緒に現場に赴いたり、ご遺族の方の話を聞いたりしていた。そのような経験を通して、先生はこの医療の重要性、奥の深さを実感されたのだと思う。常に私たちのよき理解者であり、私たちの活動を強力に支援してくださっていた。

その私が在宅を棄てて病院経営に携わることになるのだから、先生が戸惑われたのは無理もないと思う。私は先生に自分の心の中を披露して、こう申し上げた。

「柳田先生、僕には賛育会病院を立て直さなければならぬという、宿命のようなものがあるのです。その仕事に全力を注ぎますが、託されたことを遂行した暁には、必ず現場に復帰します。決して在宅ホスピスケアを棄てたわけではありません。ご心配をおかけして、申し訳ありません。」

先生はほっとしたような表情で、頷いていらした。結果的には柳田先生との約束を反故にすることはなかった。

病院長就任にあたって、自分なりに準備したこと

病院長就任を機に、私は自宅を武蔵小金井から病院近くの押上のマンションに移した。通勤できない距離ではなかったが、託された重責を果たすためには、通勤にエネルギーを取られなくなかった。このような私の身勝手な決定に妻はいつも黙って従ってくれたし、看護短大に通っていた娘も賛成してくれた。

賛育会病院長は私の Beruf (召命) であったが、それは私が一生をかけるという意味ではない。私が招かれたのは病院経営の立て直しのためだ。だから、その使命を全うするために全力投球はする

が、やがて在宅医療へ復帰することを宣言しなければならなかった。

受け入れの最終的な返事をする際、私は石原先生にはっきり「私は 55 歳になるまでに病院を立て直し、その道筋がつけば、その時点で病院長を辞めます」と申し上げた。石原先生は「困ったな」と言いながらも、私の注文を認めてくださった。

「本当に、川越は病院長をちゃんとやってくれるのかどうか、実は心配していました。」私の後任である鴨下先生の病院長就任の席のあいさつで、石原先生はそのことに触れていらした。柳田先生や親しい友人にしかそのことを話していなかったのも、こちらは気まずい思いをしながら聞いていたが、もうそのことを隠す必要がなくなったような気がして、かえって楽になったところもあった。

三つ目の準備は、緩和ケア病棟開設のための下準備を行うことだった。私が赴任した時には、賛育会病院の医師や看護



師は緩和ケアなどに全く目を向けておらず、そのままの状態では開設の準備すらままならない、と考えていた。まず人材確保や院内の意識を高めなければならぬと痛感していた。このことについては、のちに詳しく記すことにする。

私は何かを行うとき、いつもどこで、どのような形で身を引くか、ということをもとに考えている。55 歳、病院経営の立て直し。それがスタート時に設定した条件だった。

病院長には就任したが、その役職に長く留まることは最初から考えていなかった。

帝京大学医学部附属病院研修医 田村菜穂子



病院を離れる「地域医療」という名の实習で、9月のひと月をパリアンでお世話になりました。

実習させていただいて、私が入院と在宅での違いを実感した点は二点です。

一つ目は訪問の主体の違いです。病院の中では患者さんはほぼ常に病室にいらっしゃるの、こちらの都合のいい時にお話しや診察をすることができました。しかし、在宅医療では患者さんのご都合に合わせた訪問となるので、病院のようにはいきません。業務上仕方ない点もあるのですが、やはり院内では医療者側主体でした。ご無理をさせていた場面も多かったのだろうなど、状

況が変わってみて初めて思い至った次第です。

二つ目はご家族との距離です。病院ではご家族とお話するのは病状や方針のご説明をする場面が主で、他にはお見舞いにいらしている所に偶然居合わせた時くらいでした。在宅の訪問では、患者さんとほぼ同等のお話する機会をご家族に対しても持てました。学生時代、「病気を見るな、患者さんを診ろ」と話された先生がいます。「見る」と「診る」の差はこういう面から生まれるのだらうと思います。

まだ修行中の身ですが、患者さんを診る医者になっていけたらなと思っております。

今年度第1回メモルの集い、開催する

平成27年度第1回メモルの集いは平成27年9月12日(土)13時から15時までの2時間、川越厚先生、3名の看護師、ボランティアらが、平成26年4月から9月までの半年間に亡くなられた8組10名のご遺族をお招きして行われた。



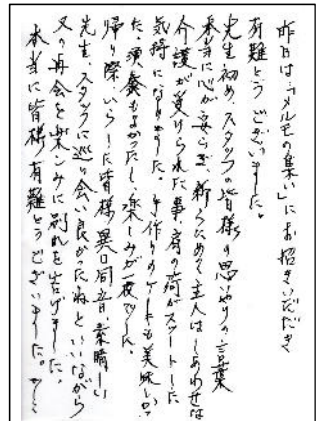
メモルの集いは、川越厚先生が故人やご遺族との関わりなどを、ご遺族一人ひとりに丁寧にお話しされ、ご遺族も当時のことを思い出して、涙されたり懐かしそうに聞き入っている方もいらっしゃった。続いて、ご遺族の自己紹介と1年をふり返っての思いや近況が話されていた。

故人への思いを葉っぱに託し、ひと声かけてメモリアルツリーへ



今回はお茶の時間にパリアン・リコーダー部が「涙そうそう」を演奏し、ご遺族の皆さんから大きな拍手をいただいた。

後半は、パリアンスタッフやボランティアもご遺族との分かち合いの輪に入り、話が盛り上がっていた。メモリアルツリーのコーナーでは、故人への思いをいろいろ考えて書いた葉っぱをメモリアルツリーに一言声をかけながら貼っていただいた。最後に恒例となった「故郷」を全員で合唱し、お帰りにメモリアルカードと手作りボランティア作成のプレゼントをお渡しして閉会となった。



メモルの会参加のご遺族から、感謝のメッセージ4通届く

今回のメモルの集いの後日、4通の感謝の手紙などが寄せられた。先生はじめスタッフの思いやりの言葉に癒されこと、手作りケーキが美味しかったこと、演奏もよかったこと、楽しいひと時だったことが綴られている。お帰りの際、いらした皆様が異口同音にすばらしい先生、スタッフに巡り合えてよかったと話していたという。ご遺族の了解いただいたので、感謝のお気持ちを綴った葉書(右)を1通、紹介する。

家族の力の大きさを知った

9月12日に行われたメモルの集いに初めて参加をさせていただきました。

それぞれ思い出や今の気持ちをお話ししてくださり、同じくがんで家族を亡くしたご遺族と時間を共有しました。今回の会に来ることを最後まで悩んだ、今もふとした瞬間に思い出して辛い時がある、とお気持ちを教えて下さったご遺族もいらっしゃいました。たくさんの葛藤や思いの中、最期を看取る覚悟をして向き合っていること、改めてご家族の力の大きさを知りました。

こうして命日を迎えたご遺族とお話しする機会は初めての経験であり、様々な思い出を聞きながら、時を経たからこそ湧いてくる想いに触れる貴重な時間でした。

家で共に過ごし、看取ったことがよかった

初めのご遺族の自己紹介で、厚先生の「道に迷った」「蚊が多かった」などのエピソードと共にいろいろ思い出したり笑ったり。涙も見られましたが、最初の緊張した気持ちが少しずつ柔らかくなっていきました。

思い出されるいろいろな言葉やシーンの悲しさや辛さは、時間がゆっくりと穏やかにしていく、時間はすごいしありがたいと言っていました。本当にそう思います。心の中も残された物を無理して片づける必要など全くないのでしょうか。死は通過点のひとつとして、受け止めてほしいという言葉が重なりました。

家で共に過ごし看取ったことをよかったという思いが、お話を聞いていると伝わってきました。そんな思いなどを葉っぱに書いて、いたわるように撫でながら、また、「私はがんばって生きてるよ。安心して」と言いながら、タペストリーに貼る様子に胸を打たれました。

思いやりや感謝の気持ちが部屋の中に満ちていて、温かなひとときでした。

大切な人を亡くす前に知っておきたい「看取り」と「グリーフケア」の講演を聞いて



講演する井手先生

平成27年9月29日午後6時～8時、すみだリバーサイドホール会議室で墨田区主催「遺族ケアを学ぶ講演会」が開催され、一般社団法人日本グリーフ専門士協会代表理事・井手敏郎先生による「大切な人を亡くす前に知っておきたい『看取り支援』

と『グリーフケア』と題する講演があった。これから死と向き合わざるを得ない多死社会を迎え、グリーフケアに取り組むうえでの最低限の知識や心掛けの分かりやすく説明のほか、先生のお話の合い間に隣の席の方と感想などをシェアする時間を設けるなど、印象深い講演だった。

グリーフとは喪失の悲嘆と言われ、生きるということは喪失体験の連続ということになる。死別というのは喪失体験でも非常に辛いきびしいものであるが、必ずしも死別に限ったことではなく、さまざまな喪失体験にどう向き合うかということが、グリーフケアの本質であり、そのように認識してもらいたいと井手先生はおっしゃっていた。

看取りをする、グリーフケアに取り組むうえで知っておかなければならないことが2つあるという。一つは相手とどう向き合い、どう接するかという他

人とのコミュニケーションで、もう一つは私はどうしたいのか、私はなにを目指すのか、私にとって大事なことは何なのかという自分とのコミュニケーションだそうだ。

グリーフケアは、私たちが向き合う一人ひとりとしっかりコミュニケーションをとれるようにする技術。私の大切な人を大事にしてくれるという感覚で繊細に関わり、相手の気持ちをいかに引き出すかという知識を持つ必要があるという。映画「おくりびと」がアカデミー賞を取った理由の一つは、主人公のチェロ奏者と納棺師の“繊細さ”だと言われている。繊細な関わりをしてくれる人に対しては、気持ちが変わり、暖かいものを感じるのだ。

パリアンでは、患者さんとご家族の悩み、苦しみなどに対して真摯に受け止め、医師・看護師などチームで対応している。ま



遺族ケアを学ぶ講演会の模様

た、ご遺族に対しては、お亡くなりになって1か月後の手紙、1年後の手紙とご遺族をお呼びしてのメモルの集いを行っている。このようなご遺族の気持ちに寄り添った活動は、多くの遺族の方々から感謝のお言葉をいただいております。今回の井手先生の講演をお聞きして、パリアンが行っているグリーフケアを進めていくうえで大きな自信となった。(江口)

勉強会報告「定期巡回・随時対応型訪問介護看護のサービス」



機器の使い方を説明するジャパンケアサービスのスタッフの方々

2015年9月11日17時から、株式会社ジャパンケアサービス錦糸町のスタッフ2名をお招きして、「定期巡回・随時対応型訪問介護看護のサービス」について勉強会を行いました。

コールボタンの使用方法からサービス導入の利点、欠点まで基本と実際を話してくださいました。パリアンスタッフからの質問事項にも答えていただきました。特に一人暮らしの方は、その人の生活スタイル、日々変化する病状に応じたケアが必要な中で、臨機応変に対応してくださるこのサービスは欠かせません。夜間は一人で対応され

ているという勤務体系やパリアンと連携する上でこちらに求めることなど、普段連携して働いているだけではわからないことが分かった、有意義な勉強会でした。改めて、チーム間の情報伝達の迅速な連携の大切さを実感しました。(報告者：飛延看護師)

フロンティア薬局との顔合わせ

2015年9月11日18時からフロンティア薬局浅草橋店のスタッフ7名との顔合わせを行いました。

川越医師から在宅ホスピスケアにおける薬局の役割、本田所長からパリアンが患者さんと接する際に大切にしていることを薬局との連携の流れも含めお話ししました。その後フロンティア薬局とパリアンとの連携において、今後の課題と対策を話会しました。

患者さんの負担を少なく訪問するためにはどうすればいいか課題を明確にすることができました。

在宅でがん患者さんが暮らすためには、自宅まで医療用麻薬をタイムリーに届けてくださる薬局の存在が欠かせません。日頃、大変お世話になっている薬局の方々とは直接お会いし、お互い患者さんと接する際に大切にしていることを確認し合えるとてもよい機会となりました。(報告者：飛延看護師)

平成27年度第1回ボランティア講座に10人が受講、9人が登録

平成27年度第1回ボランティア講座が平成27年9月5日、パリアン研修室で10人の受講生が応募して行われた。

まず最初に、厚先生のホスピスケアについての講義があった。引き続き、1枚の紙を受講生に配り、「死」というテーマで思いついた絵を30分くらいで書かせ、その絵についての思いをそれぞれが発表し、ほかの人の質問にも答えるといった授業を行った。

午後からは、ボランティアリーダー達が各々のボランティア活動内容を説明し、質問にも答えた。

講座終了後、ボランティア登録の意思があると答えた9人は、その場でボランティア登録した。



勉強会とデスカンファレンスの10月11月の予定

10月と11月の勉強会とデスカンファレンスの日程は、下表のとおりです。パリアンボランティアの方は参加できますので、希望者は事前にボランティアコーディネーターに連絡してください。

活動名	開催日時	内容
勉強会	10/2 17:00~18:00	末期がん患者のリンパ浮腫について
	11/6 17:00~18:00	非薬物療療法/嘔気・嘔吐について
デスカンファレンス	10/23 17:00~18:00	未定
	11/27 17:00~18:00	未定

(注) 日程等が変更になる場合があるので、事前に確認してください。

第3回ボランティアの集いは11月21日(土)10時30分から延期します

27年度第3回ボランティアの集いは、11月21日(土)午前10時30分~12時に延期します。ボランティアの皆さんは、万障繰り合わせて出席願います。また、特別講義として取り上げたいテーマがありましたら、ボランティアコーディネーターまで連絡ください。

なお、ボランティアの集いの出欠の連絡をメール、FAXでお願いします。

10月のボランティア活動予定

- ・訪問ボランティア：(訪問計画ミーティング) 10月16日(金)午後2時30分~(活動日)10月2日、5日、8日、16日、19日、29日
- ・サロン・ド・パリアン：10月2日、9日、16日、23日、30日は休み
- ・命日カードボランティア：10月15日(木)午前10時~
- ・手作りボランティア：10月27日(火)午後1時~
- ・事務&聞き書きボランティア：10月17日(土)午後1時~



10 ()

編集後記

グリーフとは喪失悲嘆と言われており、死別は喪失体験でも非常に辛いきびしいものである。パリアンは「家で最期を迎えたい」と希望する末期がん患者の方を支援する組織で、年間150名前後の在宅での看取りを支援している◆家で最期を迎えるためには、患者さんの死に対する苦しみやご家族の予期悲嘆(大事な人が亡くなる前から起きる悲嘆)などに対するグリーフケアは欠かせない。医師、看護師、介護、ボランティアなどパリアンチームでは、病気の苦しみだけでなく、心の悩みなどにもきめ細かく丁寧に関わり、亡くなられてからも遺族への寄り添いを忘れない◆先日の「看取りとグリーフケア」の講演会の中で、「繊細な関わりをしてくれる人に対しては、気持ちが変わり、暖かいものを感じる」と講師は言っている◆9月12日に行ったメモルの集いには、4家族から感謝の手紙をいただいた。生前の治療や介護を懐かしみ、大事な人をいつまでも忘れないでいてくれたことへの感謝の気持ちだと思ふ◆グリーフを抱えている方は心の奥底に「哀しみ」を持っている。我々は、これからも患者さんやご家族、ご遺族に繊細な気持ちで接して、その哀しみ(苦しみや痛み、悩みなど)を支え和らげられるような活動をしていきたい。(I. E)

がんサロン SAKURA

がんサロンSAKURA(さくら)は、がん患者さんとご家族が、体験や悩みを分かち合い、よりよく日々を過ごせるよう支え合う場です。参加者同士の語り合いや、医師などによる「がん」に関するミニ講義の他、個別の相談もお受けします。どうぞお気軽にご参加ください。

日時：平成27年10月24日・31日・11月21日 ※一部の回のみ
参加も可能です。
いずれも土曜日 午後2時～4時

会場：すみだ産業会館(墨田区江東橋3-9-10 墨田区・丸井共同開発ビル)
9階 第1会議室 JR/東京メトロ「錦糸町」駅より徒歩1分

対象：がん患者さんとご家族(患者さんのみでも参加できます)

プログラム

I. ミニ講義(約20分) ※内容は一部変更になることがあります。

10/24 「がん」とはどんな病気? (賛育会病院緩和ケア科部長 駒場誠弥先生)

10/31 がんはどう付き合うか (がん患者さん)

11/21 がん患者を支える社会資源(都立墨東病院がん相談支援センター 田中寛子氏)

II. 語り合い

参加者の皆さんに、がんの体験や悩みをお話いただき、「がんと共に生きていくこと」を考えます。

III. 個別の相談 ご希望の方はお申し出ください。

参加費：無料 **定員**：先着20名(各回)

申込み：各回開催日5日前までに、お名前(同伴者がいる場合はその方のお名前も)・住所・電話番号・参加希望日を、下記申込み先へご連絡ください。
(20)

お申込み・お問合せ先

企画運営：NPO法人すみだ在宅ホスピス緩和ケア連絡会あこも

TEL 03-5669-8302 / FAX 03-5669-8310 / E-Mail s-sumida@pallium.co.jp

共催：東京都立墨東病院・社会福祉法人賛育会 賛育会病院 主催：墨田区

平成27年度墨田区在宅緩和ケア事業 がん相談会

がんサロンSAKURA(さくら)

FAX用申込み用紙

FAX : 03-5669-8310

E-Mail: s-suma@allum.co.jp

参加希望日 (該当部分に ○をつけてください)	全回参加 一部参加 (参加希望日に○をつけてください) 10/24 ・ 10/31 ・ 11/21
お名前 (患者さん)	
住所	
電話番号	
同伴者のお名前 (参加の場合のみお書きください)	患者さんとの 続柄 _____
このがんサロンを何で お知りになりましたか？	

お送りいただいた個人情報は、当事業関係のみに使用させていただきます。

会場のご案内

すみだ産業会館
9階 第1会議室
(墨田区江東橋3-9-10
墨田区・丸井共同開発ビル)

JR/東京メトロ 錦糸町駅より徒歩1分

